

第1回 「ロボット考学」とは何か

1 はじめに

ロボコンマガジン誌は今回からスタイルを刷新することになり、それに応じて筆者の記事も、連載テーマを「ロボット考学と人間」と改めて、出直すことになりました。

そこで、今回のこの連載第1回は、前置きとして、耳新しい「ロボット考学」とはどのようなものなのかについて、抽象的にはなりますが(具体例については、今後の各回の記事をご期待ください)、その全貌を述べておきましょう。

2 「ロボット考学」が目指すもの

「ロボット考学」とは、文字通りロボットについて考える学問です。しかし一方には周知の通り、発音が同じの「ロボット工学」という確立された立派な工学があります。ただ、この2つの学問が違う点は、「ロボット工学」のほうはいくまでも工学、つまりロボットを設計したり作ったりするための技術に関する、物理的な学問であるわけですが、「ロボット考学」は、ロボットについての技術という範囲だけに留まらずに、幅をうんと広げて、人間存在とは何かということにも密接に関連しながら、ロボットに関係した心理学的論議や哲学的考察までもを射程に含めるものです。

しばしば「技術者には哲学がない」との批判を耳にします。かつて大学の工学部に通っているとき、その批判が筆者の胸にグサリと突き刺さり、これではならぬと発憤し、それ以来工学と並行して、人間についても哲学的に思考するようになったのでした。もちろんそれには、旧制高等学校で培われた哲学的教養も役立ちましたが、本格的に人間心理を知るために、心の宗教といわれる仏教の哲学を40年ほど学び、また、ある程度坐禅や読経などの修行もしたのです。

筆者は現在満79歳という人生の晩年期に入っていますので、これは、私のこの数十年間にわたる思考結果を、「ロボット考学」という形で後進の方々に示し、遺言に代えたいとの希望を持っての連載なのです。

そこでこれを、ロボット技術者が進むべき基本的な進路を示す羅針盤とすることはもとより、ロボットとは人間にとって一体何物なのか、これから訪れるロボット時代に、われわれ人間はどのようにロボットを導入し、どんな姿勢でロボッ



教え子が作ったロボット(ホンダのASIMO)と著者

トと付き合っていくべきなのか、さらに、ロボットに心はあるのか、あるいは心を与えることができるのか……、ということをも視野に入れて、それらの事項を可能なかぎり深く突っ込んで冷静に考究し、文明史上にまったく新しく登場してきた存在であるロボットというものの立場を、明らかにしようとするものです。

言ってみれば「ロボット考学」とは、「人間学」と「ロボット工学」とを融合したものなのです。

3 人間から学んでロボットを作る

「ロボット考学」は多角的な立場を有するものです。そのうち、ロボット技術者にとって当然であり、もっとも理解しやすいのが、ロボットをいきなり設計するのではなく(ロボットはかつて人造人間と和訳された時代もあったくらいですから)、まずは人体を十分に観察してから、それを参考にしながらロボットの設計をするという立場です。

指1本、関節1つでも、大いに参考になります。たとえ